

『花柳春話』から『文明の末路』まで 織田純一郎の翻訳論と翻訳文体について

水野 的

(青山学院大学)

はじめに

『日本の翻訳論』(法政大学出版局)の構想の段階で、ひとつ気にかかっていたのは織田(丹羽)純一郎をどのように扱うかということであった。織田の『花柳春話』はのちに森田思軒の「曩ニ我邦小説ノ趨向ヲ一變セムトスルヤ。織田氏ノ訳スル所ノ『花柳春話』之カ嚆矢ヲナセリ。而シテ是レ實ニリットン氏ノ『マルトラバース』ナリ。而後西洋小説ノ我邦ニ訳サルハモノ紛然群起セリ。然レトモ其ノ文体ハ率ネ東洋ノ旧ニ仍リテ。未タ生面ヲ其間ニ開クモノアラズ」(森田 1889)という評価にも見られるように、明治の翻訳史上無視できないものである。ところが、翻訳についての織田の見解となるとあえて取り上げるほどのものはないように思われたのであった。しかし、初期の『^{歐州}花柳春話』から『通俗花柳春話』、『いさ子』を経て、晩年の『文明の末路』に至る過程に見られる文体と翻訳手法の変化は記憶に留められるべきである。

本稿は織田の翻訳に関する考え方を探るための準備として、関連する資料と若干のノートを掲げておく。なお織田の伝記的事実については柳田(1961b)、近代文学研究会(1962)を参照されたい。

1. 『^{歐州}花柳春話』(明治 11-12 年)

『花柳春話』は Edward Bulwer Lytton の *Ernest Maltravers* と *Alice, or The Mysteries* を抄訳したものである。翻訳に関しては、織田自身のまとまった記述はない。ただ、附録の末尾に以下のような記述があるのみである。

「譯者云ク^{ロウドリトン}牢度倫氏小説二十二卷ヲ著シ細カニ古今ノ人情ヲ探ツテ遠近ノ異俗ヲ記シ一^{ドク}讀以テ人世ノ悲歡正邪ヲ詳知スルニ足ラシム而シテ我朝ノ為永春水ノ著ニ係ル梅曆等ノ如ク讀者ヲシテ徒ラニ痴情ヲ醸發セシムル者ニ非サルナリ且ツ其書概^{オホム}ネ實跡アル者ニ基キ彼ノ空中ニ樓閣ヲ畫キ強ヒテ有ル可カラサルノ人情ヲ寫出スルノ類ニ非ラス故ニ其言切ニシテ其情深シ是レ乃チ其書名、人口ニ膾炙シテ遂ニ我邦語ヲ以テ翻譯セシムルニ至ル^{ユヘン}所以ナリ唯タ^{ウラム}恨ラクハ譯者ノ筆甚ク拙ニシテ原書ノ綺言麗語ヲ模寫スルコト能ハザルヲ、因テ願フ文化日ニ開ケ風流才子復タ瓦礫ノ譯書ヲ待タス金玉原書ニ就テ親シク倫氏ノ書味ヲ占メ賜ハンコトヲト云爾」(『花柳春話』附録:七十六-七十七頁)

これは翻訳の動機を述べているにすぎず、翻訳態度については触れていない。

2. 『通俗花柳春話』(明治16年)

『通俗花柳春話』の「叙」も翻訳の動機の説明である。ただし、なぜ「通俗」にしたのかについては、「舊譯ハ漢文體にして婦女兒童の或ハ解し難き所なしとせず」と、その理由を説明している。

「(…)此書ハ英人李頓氏の著にして英國近世の風俗人情を寫して剩す所なく政事家の内密、黨派の密情、親子の親、夫婦の愛、貴賤の別、貧富の差其事ハ皆人の視て而して未だ見ざる所を載せ人の知て而して未だ識ざる所を記す而して其言ハ詼諧甘きこと飴蜜の如し是を以て讀者終日にして足らず燭を秉て猶飽なし而して余も亦蓋し其一人のみ故に余嘗て英國より還の後此書を譯して以て世に之を公にし以て英史を讀む人をして其近世の風俗人情を知しめ且英史の本體を完備ならしめんことを望めり蓋し正史ハ大方の識者業に已に之を翻譯する所多ければなり然ども舊譯ハ漢文體にして婦女兒童の或ハ解し難き所なしとせず且舊時ハ婦女兒童にして英史を讀む者多からずと雖も今ハ則ち教育の道大に進み其史を讀むこと殆ど成童男子に異ならず故に今其舊文を一變して苟も四十八字を讀得るの徒ハ之を讀で解せざるの憾なからしめ以て啓蒙英史の風俗篇に充んとす彼の我國坊間に行はる、院本情史の風俗を紊り徳義を傷り父子兄弟の團座して見るべからざるの書と同日に論ずるなくんば幸甚」(『通俗花柳春話』叙 二-四ページ)

第三編諸言も翻譯の動機に触れている。

「久方の雲の那邊や和田海の波路遙けき異國の書を繙き讀なべに其事情の千態萬状を我日本の婦人等又ハ幼稚童兒にも語り聞せて西東國も風俗も變れども變らぬものハ人情の悲歎哀樂世の中の勸善懲惡なることを説ま欲しくハ思へども余知人の寡きのみか看人毎に説も得ならず偶然アリス、マルツラバース、と呼る冊子の有ければ讀るが儘に翻譯て彼の事情を知せんともものしたれども蜘蛛のいとち拙なき筆なれば綴れる文章ハ石の如く原文の光なす玉の如きにあらねども其文意を讀取給はゞ余素よりの志を達る便宜になりもせんと斯ハ茲に題し侍りぬ」(『通俗花柳春話』三編諸言)

以下に原文と『花柳春話』、『通俗花柳春話』の冒頭部分を掲げる。

<原文>

SOME four miles distant from one of our northern manufacturing towns, in the year 18—, was a wide and desolate common; a more dreary spot it is impossible to conceive—the herbage grew up in sickly patches from the midst of a black and stony soil. Not a tree was

to be seen in the whole of the comfortless expanse. Nature herself had seemed to desert the solitude, as if scared by the ceaseless din of the neighbouring forges; and even Art, which presses all things into service, had disdained to cull use or beauty from these unpromising demesnes. There was something weird and primeval in the aspect of the place; especially when in the long nights of winter you beheld the distant fires and lights which give to the vicinity of certain manufactories so preternatural an appearance, streaming red and wild over the waste. So abandoned by man appeared the spot, that you found it difficult to imagine that it was only from human fires that its bleak and barren desolation was illumined. For miles along the moor you detected no vestige of any habitation; but as you approached the verge nearest to the town, you could just perceive at a little distance from the main road, by which the common was intersected, a small, solitary, and miserable hovel.

『花柳春話』

「爰コゝに説とき起ハす話柄ワは市井シを距サること凡サそ四里許シにして一つの荒原ヨウゲンあり緑草リョクサウ繁茂ハンモ(クサボフボフ)、怪石クワイセキトツツ突兀トツツ、満眼マンガン荒涼アウリョウとして四顧シコ(シハウ)人聲ニンセイなく恰アタカも砂漠サバクの中ナカを行イくか如ニく唯悲風ヒフウの颯々ソウソウとして草蕪サウブに戦ソコくを聞キくのみ寂寞セキバクの惨景サンケイ(カナシキケシキ)云イふへからず人ヒトをして覺ヒへず慄然リツゼン(ゾツ)たらしむ四時シ既に此コの如ニし況イハんや冬陰トウイン黯淡アンタン(マツクロ)物色モノシキをも分ワつへからさる暗夜アンヤをや寒雨シヤウシヤウ蕭々ス時に過スき凍風トウフウ烈々リョウリョウ地に吼コエび唯ヒた平蕪ヘイウ荒漠カウマクの間遙ハルかに一製造所セウザウシヨの孤燈コトウ明滅メイメツ(キエキエ)たるを見る火光カウカウは湿シツを帯オビひて焰青エンセイく影暗エイく其凄愴セイソウの情セイソウは燐火リンカ(ヒトダマ)の古戦場コセンバウに燃モユるに異イならず荒涼アウリョウの延袤エンバウ(ヒロサ)四里シに下シらされとも人跡ニンジ全く絶ワズへ僅ヒトかに一條イツの小徑コウあつて東西トウシに通トす北キタに折マれて行くこと凡サそ三四十歩サンシヨウにして一つの破屋ハオウ(アバラヤ)あり(…)¹」

『通俗花柳春話』

「都ミヤコなす街巷チマタを距サること四里許シ最リと廣漠ヒロカなる荒原アレノあり緑草クキハ背丈セダケに生茂オヒシり行歩タドる路ミチさえ絶續タヘに往來ユキふ人ヒトハ稀マレにして唯聞タくものハ吹風フクカゼの草葉クサバに戦ソコぐ音ネばかり其荒涼オトき惨景ソノモノハ外ホカに譬たとへんようぞなし況マて頃ころしも冬ふゆの夜よの白黒あやめも知らぬ鳥羽玉ウバタマの暗やみの折柄オリ降からしきる雨あめを誘さそふて吹風フクカゼの野末ノノの草くさの間隙あひだより遙ほろかに見みゆる燈火トモシビハ誰たが住すむ家いへか知らねども滅きてハ明ある其状シマハ燐火オニの光ひかりに異ことならず最いと凄然おそろ状景しきなり此この荒原はらの延袤ひろハ四里しに満みざれど夜よハ往來ゆきの人ヒトもなただく唯一條ひとの細道ほそみちを西にしと東ひがしに通つうずるのみ之これを歩たりて北きたに折をれ一町餘ひとまちあまりの處ところにて最いと年經としりたる破屋あばらやあり(…)

この部分の訳は比較的原文に忠実な方であるが、それでも明らかに相当の省略がある。前者

¹ 原文はカタカナであるが、読みやすいようにひらがなにした。漢字の後のカッコ内は縦書きの原文の左側に振られた読み仮名である。なお合字はすべて普通のかなに直した。

は漢文訓読体を基本としており、後者は「馬琴流の七五調が主」(柳田 1961a: 226)である。『通俗』は『花柳春話』を、改めて原文を参照することなく書き直したように見える。なお柳田は「この本文の馬琴調は、けだし丹羽氏自身のやったものではなかろう」と書いている(同上:227)が、特にその根拠は挙げていない。

3. 『いさ子』に見られる翻訳観

明治22年に第一巻が刊行された『いさ子』(Mrs. Henry Wood の Easy Lynne の翻訳)の第一巻の「例言」に至ってようやく、織田の翻訳態度への言及が見られる。またここでは織田が日本語についてどのように考えていたかも明らかにされている。

織田純一郎譯 『いさ子』 第一巻(明治22年)例言

「一 此書は直接に字句の通ずる限り原文を直譯したるものなれども時に章句の位置を轉換し言語を換用せし所あり是れ看客の解し易からんことを欲してなり然れども其原意に到りてハ毫しも損する所なし看官幸に之を諒せ

(中略)

一 此書譯文ハ力めて通俗の言語を用ひたれば簡健快樂捷の文字に乏しく殊に「御坐います」ま又ハ「ません」或は「けれども」等緩漫冗長なる詞遣多し是れ譯者の最も避けんことを欲せし所なれども我國の言語ハ和歌の調子にて勢力に乏しく僅に命令詞を除くの他ハ皆な緩漫冗長なれば今遽に之を改むる能はず已を得ず其儘を茲に寫し出せるなり

一 人名を日本名に模擬するハ世に議論あることなれども聞慣れざる外國の人名を片假名にて長々しく記するときは看官の記臆し難き恐あれば成るべく原音に近き日本の人名を以て之に代へ又人名を變更すること已に此の如くなれば挿畫の人物も亦日本人に變へ唯家屋衣服什具の如きハ之を存す讀者幸に其混合を咎る勿れ」

第二巻(明治23年)の「叙」には第一巻に対する新聞の「原文直訳」という批評を引用して、翻訳手法についての言及がある。おそらく織田純一郎唯一の「翻訳論」であろう。しかしその中味は、翻訳には「直訳」と「意識」があるが、「余惑ふて自ら決する所を知らず」というものであった。

『いさ子 第二巻叙』

「人各自の持病は自慢にあり、殊に筆を執るものほど自慢に長けたるはなし、世之を天狗と云ふとかや。余は素より鼻も普通より低く決して天狗にあらず、又翻譯は假聲と一般唯原物に同じきを冀ふのみ、故に褒めらるゝも誹らるゝも、毀誉榮辱は一に原著者にありて余の與り知る所にあらず。然れども「是なれば」位の感想を抱けばこそ、厚顔に金を以て買ふ人に対するなれ、然らざれば寧ろ翻譯に従事せざるべからん。此持病に対する良薬は世の批評にて、天狗と云ふ大痼疾家さへも爲に鼻を傷めることなり、況や余の如く鼻低きものは、其低きだけ痛疼を感ずること浅きも、仍ほ多少の感覺ありて自ら顧みる所あるべきに於をや。さ

れば今左に諸新聞の批評中良薬をたまひし二三を抜粹して其厚意を謝し、併せて今後の鞭撻と為さんとす

「……如何にも原文直譯の跡ありありと見え横文に通ずる人は之を讀て原文の妙を味ひ得べきも然らざるものは讀み慣れぬ文字に興味を減すべしと思はるゝ所なきに非ず……孰れも直譯なるべけれど甚だ耳慣ざる嫌あり其他一体に斯る気味ありてすらすらとせぬ處多けれども……之を要するに一字一句も原文の意を失はざらんとするに力るのあまり疵瑕を生じたるものにして譯文の上乗とも感服し難し(十一月十六日時事新報)

「……文章さらさらとして論なく味より云へば少しも甘みなけれども単に原書の意を盡したる点より云へば或は稱べき所あらんかと思はるゝなり(十一月二十三日讀賣新聞)

「……唯一箇批難し置きて譯者の再思を請ふべきは斯書の表紙の題字に英字を以てイーストリン、バイ、ヘンリー、ワードと書し其直下に日本字を以てワード女史著と書したる事なり元來ヘンリーは男性にて女性ならざれば英字のみを見たらんにハ男子の著述とほか思はれず然るに日本字には女子著とありて如何にも氣障なれば第二三兩卷を上梓せらるゝに當てハヘンリー、ワードの上にミツセスなる英字を置かれたき者なり此事小なるに似たれども表紙飾を貴ぶ日本の小説好に一の笑ひ種を與るハ譯者の爲めに評者が憾みとなす所あればなり(十二月八日東京公論)

時事讀賣の二新聞紙は要する所直譯に過るの嫌ありとせらるゝものゝ如し。其れ或は然らん。然れども翻譯は原文の字句を其儘他の言語に寫し出すべしと云ひ、又原文の字句を他の言語に改めて其意を寫し出すべしと云ふ二説ありて、孰れを是として可なるや大に惑へり。若し第一説を取るらん乎、意譯に若かず。而して直譯は原文の妙味あるも、讀難きの嫌なきにあらざるのみならず、時に全く譯し得べからざる文字あり。リトン卿の如きもホークのパラフレス *Plus quam se sapere, et virtutibus esse priorem Vult, et ait prope vera.* を英語に譯し得べからずとせり。卿の如き大家さへも猶ほ且然り。況や余の如きものに於をや。又意譯は讀難き嫌なきも、原文の妙味を失うふ恐あり。清人の言に翻譯は錦裏なりと云へり、實に錦の裏を観る心地せらるゝこと少なからず。然らば如何にして可ならん乎、余惑ふて自ら決する所を知らず、再び茲に教を乞はんとするなり。而して東京公論の忠告は唯謹て其命に従ふのみ。」

では、その「直訳」とはどのようなものであったのだろうか。そもそも何を指して「直訳」と言っているのか。特徴的な箇所を原文と対比しながら見ていく。

A noted character had been the Earl of Mount Severn. Not that he had been a renowned politician, or a great general, or an eminent statesman, or even an active member in the Upper House; not for any of these had the earl's name been in the mouths of men. But for the most reckless among the reckless, for the spendthrift among spendthrifts, for the gamester above all gamesters, and for a gay man outstripping the gay—by these characteristics did the world know Lord Mount Severn. It was said his faults were those

of his head; that a better heart or a more generous spirit never beat in human form; and there was much truth in this. It had been well for him had he lived and died plain William Vane.

「伯ハ有名き人なりき。然れども其有名は非凡なる政畧家、または軍功ある將軍、または拔群なる政治家、または卓越したる国会上院の議員たる故にあらず此等の爲には伯の名は曾て人の口頭に上らざりき。然れども世の懶惰者の中にて最も懶惰け浪費者の中にて最も浪費し賭博者の中にて最も賭博し放蕩者の中にて最も放蕩家といへるを以て世の中は伯爵山の井少将を知れり。若し伯が平民の何某に生れ平民の何某にて死したらんには伯の爲め却て僥倖なりしならんか、(…)」(第一卷二頁)

たしかに接続詞や代名詞を明示化(orを「または」、theseを「此等」)しているという特徴はある。また、繰り返しをいとわず、微に入り細を穿った描写(表現形式)も織田や書評子にとっては直訳と感じられたかもしれない。なお、織田は「字句の通ずる限り原文を直譯」したと言うが、原文の下線を付したところは省略されている。また、ここで注意すべきなのは、「き」や「り」などの過去時制を表現するための助動詞が使われていることであろう。

Look at the visitor well, reader, for he will play his part in this history. He was a very tall man of seven and twenty, of remarkably noble presence. He was somewhat given to stooping his head when he spoke to any one shorter than himself; it was a peculiar habit, almost to be called a bowing habit, and his father had possessed it before him. When told of it he would laugh, and say he was unconscious of doing it. His features were good, his complexion was pale and clear, his hair dark, and his full eyelids drooped over his deep gray eyes. Altogether it was a countenance that both men and women liked to look upon—the index of an honorable, sincere nature—not that it would have been called a handsome face, so much as a pleasing and a distinguished one. Though but the son of a country lawyer, and destined to be a lawyer himself, he had received the training of a gentleman, had been educated at Rugby, and taken his degree at Oxford.

「河原ハ年齢廿七八にて長高く人品好く頭髪黒くして顔色白く殊に眼元に愛嬌を含みたる^{などかほかたち}杯容貌姿態とも総て人好のする状ありて世に所謂る美男子に^{よいはゆるびなんし}あらずも何處となく気高く其性質の温厚篤実なるハ一目して知りぬべく且少年の時オックスフォードの大学にて学位を授り父の遺業なる代言を以て自ら業となすものなれば此地方にてハ一と云ふも二と下らざる人物なりし。」(第一卷七頁)

日本語にするには描写があまりに微細すぎると考えたのか、原文の下線部は省略されている。逆に訳文の下線分は原文にはなく、織田による付加である。その結果、いわゆる直訳とは言い

難い訳文になっている。しかし、次のような会話の訳には直訳と言ってよい表現が現れる。

"I am happy to see you. You perceive I cannot rise, at least without great pain and inconvenience. My enemy, the gout, has possession of me again. Take a seat. Are you staying in town?"

"I have just arrived from West Lynne. The chief object of my journey was to see your lordship."

"What can I do for you?" asked the earl, uneasily; for a suspicion had crossed his mind that Mr. Carlyle might be acting for some one of his many troublesome creditors.

Mr. Carlyle drew his chair nearer to the earl, and spoke in a low tone,—

「伯「ア、河原君、宜うこそ、君の御覧の通り僕ハ起つことが出来ない、少くも非常の疼痛なしには、僕が大敵一痛風一ハ再び攻寄て来ました。サア先づ座りたまへ。君ハ何日此方角へ 河原「唯今ウエストリンから参たばかりです。実ハ閣下に拝謁するのが第一の目的で出掛ました。伯「何か僕が君の御用に達ことが出来やうか子」伯ハ宛も案じ気に問たりき、何となれば河原ハ代言人なれば伯が債主の中甲乙より頼まれ来りしやとの疑團忽然胸中に浮び出たればなりし。河原ハ椅子を伯の傍近く摺寄せて聲を低め(…)」(第一巻六-七頁)

“You perceive I cannot rise, at least without great pain and inconvenience.”を「君の御覧の通り僕ハ起つことが出来ない、少くも非常の疼痛なしには」と訳出しているところは、かなり稚拙な直訳と言ってよい。もう一箇所だけ挙げておく。

At seven o'clock the dinner was announced, and the earl wheeled into the adjoining room. As he and Mr. Carlyle entered it at one door, some one else came in by the opposite one. Who—what—was it? Mr. Carlyle looked, not quite sure whether it was a human being—he almost thought it more like an angel.

A light, graceful, girlish form; a face of surpassing beauty, beauty that is rarely seen, save from the imagination of a painter; dark shining curls falling on her neck and shoulders, smooth as a child's; fair, delicate arms decorated with pearls, and a flowing dress of costly white lace. Altogether the vision did indeed look to the lawyer as one from a fairer world than this.

"My daughter, Mr. Carlyle, the Lady Isabel."

They took their seats at the table, Lord Mount Severn at its head, in spite of his gout and his footstool. And the young lady and Mr. Carlyle opposite each other.

「斯て七時の自鳴鐘と共に晚餐の準備調ひ伯ハ椅子の儘挽れて隣室に伴はれ河原も其後に踵て従ひ往しが今一方の入口より何人か入來れり。吁、人か一物か一抑々視線は如何なる感覺を起せしか。河原ハ一目して殆ど天女の天降りしかと思ひたりし。淡く麗はしき少女の姿、世に秀で、美しき顔、滑かなる頸に懸りし光澤なる緑の髪、珠玉と共に光を放つ白き軟弱き腕、雪を欺く白レースの裾長き衣、河原の目には総て人間のものと見えざりき。伯「僕の娘です、河原君、いさ子」三人は食卓に就き山の井伯ハ首座、いさ子姫ハ左河原ハ右に座したり。」(第一卷十五-十六頁)

この部分も若干の省略と付加はあるが、ほとんどの要素が訳出されている。これは「周密文」と言っても過言ではなからう。全体として『いさ子』には、漢文訓読的要素の後退と時制表現(下線部の助動詞)への配慮、会話文の処理などに、織田の翻訳意識の変化が見て取れる。この変化を促した要因ははっきりしないが、織田を取り巻く翻訳環境も一つの要因であったかもしれない。明治20年には森田思軒の「文章世界の陳言」と「翻訳の心得」、明治21年には二葉亭四迷の『あひゞき』、明治22年には森田思軒の『探偵ユーベル』や益田克徳の『夜と朝』が翻訳されている。織田がこれらの何点かを目にしていても不思議ではない。

4. 『文明の末路』(大正6年)

『文明の末路』は Ignatius Donnelly の 1890 年の小説、Caesar's Column: A Story of the Twentieth Century の翻訳である。この翻訳については柳田泉に「織田氏の翻訳小説『文明の末路』について」(柳田 1961c)という小文があるが、これは織田の『文明の末路』という翻訳の存在が判明したという内容の文章であり、この時点では柳田は実際に読んでいない。実はこの Caesar's Column は明治36年(1903年)に磯野徳三郎の翻訳により『文明の大破壊』と題してすでに出版されている。『文明の末路』には、陸奥廣吉(陸奥宗光の長男)の「はしがき」がついており、ここに翻訳と出版にいたるいささと訳者が織田純一郎であることが明らかにされている(ただし奥付は「譯者 無名氏」となっており、織田の名はない)。これは全文を引いておく。

「はしがき

今から丁度二十四年前、私は英国の田舎を旅行してゐた。或る駅で汽車を待ち合せ中、ふと見ると停車場の前に、侘びしい本屋があつて、僅許りの書物を並べてゐた。其中から青い表紙の一冊を見付け出し、なにがしかの小貨幣を投じて買ひ求めたのがシイザース、コルム(Caesar's Column)といふのであつた。

旅から旅へと巡り歩きつゝ、汽車の中やホテルの窓の下で、それに読み耽つたが、其書は

千八百九十一年の出版にかゝり、内容は百年後の世界を想像したもので、事柄は総べて千九百八十八年のことになつてゐる。紐育に於ける阿弗利加の一旅客から、故國の兄に宛てた手紙風の文章で、空想は空想でも、基礎を学問の上においてゐるので、誠に面白く、當時私は稀れに見る珍書として愛讀したのである。

それから歳月を経る中に、シイザース、コルムは、私の書齋の一隅に保存せられたまゝになつてゐたが、世界の様子は、政治上に経済上に、兎角この青表紙が預言した軌道を踏んで来るやうに思はれてならぬ。一々思ひ當ることが多いと云ふ風である。其処で私は原著者が社會風教の爲めにこの書を著した志を酌み取り、これを日本文に譯する事を思ひ立ち、織田純一郎君に囑して、其の全文を譯了した一それは今から十數年も前の事である。

しかしながら、原著者の承諾を得てゐなかつたり何かして、まだこの書の出版を執行し得ない中にも、欧米と言はず東洋と言はず、この書に豫想されたやうな事實が、少からず實現して来る。それで私はこの譯書をばいよいよ出版する事を希望し、昨年一月熱海に滞在中一書を裁し、英國なる原著者に宛て郵送した。

すると其の手紙は、長らくの間、英米の郵便線路を彷徨した末、漸く原著者ドネリー氏(Ignatius Donnelly)の子息で、北米、ミネソタ州のセントポール市に辯護士を業としてゐる人の許に配達された。此手紙が英米兩國内諸方に轉送せられ、散々各地の郵便局を困らせた後漸く此辯護士を探し當てたのは、誠に珍らしいこととして、彼地の一新聞は私の手紙の封筒に、色々の印や添書のあるものを挿畫として記事を掲げた位である。其の人から昨年の三月二十八日附で、私に宛てられた返書が届き、この書の和譯出版を快諾された。また其の書状に據ると、原著者ドネリー氏は、千九百年の一月一日に亡なられたさうで、十九世紀に於て二十世紀末の預言をした人が、二十世紀の最初の日に死ぬといふのも、何かの因縁であらうと思はれた。

斯く私にとって、話柄と追懐との多いこの譯書は、上司小劍、仲田勝之助両君等の盡力加筆を得て、昨年より本年へかけ、其一部を讀賣新聞に掲載せられしが、今回更に書物として全篇を出版せらるゝに至りしは、私に取り悦ばしいことで、またこの書中にある奇想警説が、讀者に感興を與ふると同時に、自から其間に見出し得る風刺教訓が、世道人心を裨益する一端ともならば、誠に幸福の次第である。

大正六年八月

柳田泉は先の文章で、「その生涯をみれば、別に志士とか烈士とかほめるべき熱情的なところはなく、表面はあくまで風流才子的な行き方で終始したかに見えていた織田純一郎にも、こうした国家社会を憂える骨があった」として、「実は彼の人柄をちょっと見直したのである」と書いているが、「はしがき」に見られるように、実際は織田は陸奥に依頼されただけであつた。陸奥が織田純一郎に翻訳を委嘱したのが大正6年(1917年)の「十數年前」とすると、明治35年から明治39年(1902-1906年)ごろと考えていいかと思う。すると織田が翻訳した時期は、磯野徳三郎の

『文明の大破壊』(明治36年 1903年)とほぼ重なることになる。ただ、磯野の訳書が明治36年に刊行された事情は不明である。

また「はしがき」には、「上司小剣、仲田勝之助両君等の盡力加筆を得て」とあるから、少なくともこの2人、あるいはどちらかが加筆したらしいことが分かる。上司小剣(1874年(明治7年)-1947年(昭和22年))は、読売新聞社の編集局長をつとめた小説家であり、大正3年(1914年)に代表作『鱧の皮』^{はも}を発表している。仲田勝之助(1886-1945)は大正-昭和前期の美術評論家である。加筆したのは上司小剣である可能性が高いだろう。とはいえ、その加筆の程度は分からない。ちなみに『鱧の皮』の文体は次のようなものであった。

「筋向うの芝居の前には、赤い幟が出て、それに大入の人数が記されてあつた。其處らには人々が眞ッ黒に集まつて、花電燈の光を浴びつゝ、繪看板などを見てゐた。序幕から大切までを一つ一つ、俗悪な、浮世繪とも何とも付かぬものにかき現した繪看板は、芝居小屋の表つき一杯に掲げられて、竹に雀か何かの模様を置いた、縮緬地の幅の廣い縁を取つてあるのも毒々しかつた。」²(上司 1952:51)

以下に原文と『文明の末路』、『文明の大破壊』の冒頭部分を掲げる。

<原文>

My Dear Brother:

Here I am, at last, in the great city. My eyes are weary with gazing, and my mouth speechless with admiration; but in my brain rings perpetually the thought: Wonderful! -- wonderful! -- most wonderful!

What an infinite thing is man, as revealed in the tremendous civilization he has built up! These swarming, laborious, all-capable ants seem great enough to attack heaven itself, if they could but find a resting-place for their ladders. Who can fix a limit to the intelligence or the achievements of our species?

But our admiration may be here, and our hearts elsewhere. And so from all this glory and splendor I turn back to the old homestead, amid the high mountain valleys of Africa; to the primitive, simple shepherd-life; to my beloved mother, to you and to all our dear ones. This gorgeous, gilded room fades away, and I see the leaning hills, the trickling streams, the deep gorges where our woolly thousands graze; and I hear once more the echoing Swiss horns of our herdsmen reverberating from the snow-tipped mountains. But my dream is gone. The roar of the mighty city rises around me like the bellow of many cataracts.

² 『鱧の皮』は達者な関西弁の会話文に特徴があるが、ここでは描写の箇所を引いておく。

『文明の末路』

「兄さん—

私はたうとう此大都會に來た。見る物聞くもの皆驚くばかりで、何と云つていゝか云ひやうがない。

この途方もない文明を建設へた人智の際限なさ！ 梯子が架けられるものなら、九天にも登らう。あゝ誰か吾々人間の智慧や功業に制限を劃けられようぞ？

しかし私は此處の文明を讚歎はしても、心は自ら他に向ふ。あらゆる此榮耀榮華から去つて、亞非利加の高い山間にある我家を思ひ、原始的な單純な牧畜を思ひ、慈愛深き母や兄や其他の親しい人々を思ふと、忽ち此の金色燦爛たる立派な室は消え失せて、瘦歪つた丘や緩く流れる川や、深い狭間に草飼ふ多くの羊が眼前に浮んで、雪を戴いた峰から響く角笛の音が聞えて来る。

けれども我に返ると、此絶大な都會の喧しい響が恰も數條かの大瀑布のやうに殷々として轟いてゐる。」(『文明の末路』一-二頁)

わずかに漢文的措辞が残つてはいるが、現代語に近い言文一致体が使われている。原文下線部は省略されており、点線の下線部はかなり意識されている。これを織田訳とほぼ同時期に翻訳されたと思われる磯野徳三郎訳の該当部分と比べてみよう。

『文明の大破壊』

「余は終に大都に達したり、眼は觀視のために疲れ口は嘆美を以て語なし、而かも余か脳裡に絶えず鳴動するは『驚くべし、驚くべし、最も驚くべし』との思想なり、人が築き成せる文明は驚惋も猶ほ餘あり、人は如何に無限の物なるぞ。此役々たる無數萬能の蟻は、若し彼等にして唯其梯子の立脚地を発見するを得ば、彼らは天其者をも能く攻撃するに足る力を有する者の如し。

誰か吾々人類の睿智若くは功業に限界を置くを得んや。然れども吾人の賛美は此處にありとするも、吾人の衷懷は或は他邊にあらん、左れば余が思ひは漸く満目の莊嚴華麗を去りて、遙に亞非利加の故郷に、單純なる牧畜の生活に、暖き一家の團欒に歸り、眼前の金殿玉樓は消滅して、牛臥し羊眠る山青き水清き幽境を認め、再び晴巒に反響する牧笛を聞く。³

左れど家郷の夢は醒めぬ、大都の喧囂は轟然として飛瀑の響の如く余の周囲に起れり。」(『文明の大破壊』五-六頁)

こちらは織田訳に比してかなり原文に忠実な訳であるが、旧態依然とした漢文訓読体であり、漢文的句法と漢字熟語が多い。

³ 下線部には一文字ごとに傍点「、」がふられている。ルビはない。

織田は明治11年の『花柳春話』から始めて30年ほどの間に、漢文訓読体から現代語に近い
言文一致体に至る文体の変化を生きた。その懸隔の程度は、たとえば織田自身の『寄想春史』
(1879/M12)と大町桂月の『ポンペイ最後の日』(1915/T4)の訳文の差異にも匹敵するだろう。

'An ostentatious, bustling, ill-bred fellow,' muttered Clodius to himself, as he sauntered
slowly away. 'He thinks with his feasts and his wine-cellars to make us forget that he is the
son of a freedman—and so we will, when we do him the honour of winning his money;
these rich plebeians are a harvest for us spendthrift nobles.'

『寄想春史』

「コロデヤス[少年の名]之を目送し徐歩杖を曳き獨語(ヒトリゴト)して曰く賤奴何ぞ交際の道
を疎(ウトキ)なる此の如きや唯だ儲金(カネタメル)と賽神(シンジン)の二つを知て而して己れ
の曾て奴隷(ツカヒト)たりしを知らざる者の如し然れども吾輩若し樗蒲(バクエキ)に勝て彼れ
の金銀を得ば亦何の憾か之れ有らん吁賤奴も亦我輩士人の為めに益なしと為さざるなりと」
(丹羽 1879: 2-3)

『ポンペイ最後の日』

「クローヂアスは別れてから「見栄坊の、下賤者めが」と獨り言して呟いた。「彼奴め人を
御馳走したり酒でも飲ませれば、彼奴が奴隷から成上り者の子供だといふ事を我々が忘れ
てしまふと思つてやがる。だが實際彼奴の金をせびる時には、一時其事を忘れるのだな。
あゝいふ金持の平民共は我々錢使ひの荒い貴族の儲けものさ」(大町 1915:4-5)

おわりに

本稿では織田純一郎の翻訳に関する考え方を探るために、残された資料をまとめて提示した。
翻訳態度(方針)を明言しておらず、わずかな資料しか残されていない翻訳者の翻訳について
の考え方を探るには、基本的には翻訳テキストそのものを同時代の翻訳や翻訳規範(慣行)と関
連づけながら分析し、推測するしかない。その作業は必然的に労働集約的なものになる。

織田純一郎は大正8年貧窮のうちに京都で没した。享年六十九。木村毅は「才子、才に溺れ、
尾大ふるわず、末路蕭條」(木村 1972:399)と書き、三田村鳶魚はその日記に、「織田純一郎
京都に死す、六十九、古き新聞記者にて、西洋小説を訳せし人なり、文も妙ならず、格別好評
のものもなかりし、冴えぬ男といふべし」と書いた。ずいぶんな言われようであるが、当時の一般
的な評価を物語っているのかもしれない。

織田は『文明の末路』を手にとることができたのだろうか。

.....
【著者紹介】

水野 的(MIZUNO Akira) 青山学院大学文学部英米文学科教授。日本通訳翻訳学会事務局長。
専門は通訳研究、翻訳研究。
.....

文献

- イグネエシュース・ドネリイ原著(1917/T6) 『文明の末路』實業の日本社
磯野徳三郎(1903/M36) 『文明の大破壊』博文館
大町桂月編(1915/T4) 『ポンペイ最後の日(世界名著選第一篇)』植竹書院
織田純一郎訳(1889/M22) 『いさ子』
織田純一郎訳(1883/M16) 『通俗花柳春話』
上司小剣(1952) 『鱧の皮他五篇』(岩波文庫)
木村 毅(1972) 「解題」『明治翻譯文學集(明治文学全集 7)』筑摩書房
近代文学研究会(1962) 「織田純一郎」『近代文学研究叢書第 18 卷』(昭和女子大学光葉会)
丹羽純一郎訳(1878-1879/M11-12) 『歐州
奇事花柳春話』
丹羽純一郎訳(1879/M12) 『歐州
奇話寄想春史(初編)』
森田思軒(1889/M22) 「『夜と朝』叙」(益田克徳訳『夜と朝』)
柳田 泉(1961a) 「明治初期の翻訳英国小説」『明治初期翻訳文学の研究』春秋社
柳田 泉(1961b) 「『花柳春話』訳者 織田純一郎伝(旧姓丹羽氏)」『明治初期翻訳文学の研究』春
秋社
柳田 泉(1961c) 「織田氏の翻訳小説『文明の末路』について」『明治初期翻訳文学の研究』春秋社